

Ⅱ - 10 委員会構成団体報告編 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）の活動について

福島 幸宏 全史料協東日本大震災臨時委員会 事務局 京都府立総合資料館

0. はじめに

本稿では、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会が今回の東日本大震災に対して、どのように対応したかを述べ、同時にその問題点を指摘する事を目的とする。

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(以下「全史料協」)は、国や地方自治体、大学の公文書館、文書館等の機関及びその職員等で1976年に結成された団体で、平成24年3月31日現在、機関会員140機関、個人会員287名が参加している。結成以来、国民共有の財産である歴史資料・公文書等の保存・活用・継承の促進をめざして活動してきた。現在は会長職および事務局を都道府県立の公文書館等が輪番で務めており、平成23・24年度に京都府立総合資料館がその順番にあっていた。そのために震災対応についても京都府立総合資料館がとりまとめを行う事になった。本稿はその立場からのものである事をお断りしておく。

なお、本稿は、井口和起・福島幸宏2011「東日本大震災と全史料協の対応」『アーカイブズ』45と福島幸宏2012「東日本大震災臨時委員会の活動について」『記録と史料』22をもとにしている事をお断りしておく。

1. 全史料協の当初の対応と要望活動

全史料協では地震発生の直後から調査・研究委員会(事務局:沖縄県公文書館)が加盟機関への被災状況の聞き取りを開始した。北海道・東北・関東・北陸・中部の各加盟機関に電話等で安否・被災状況の聞き取りを行い、発災翌日の3月12日の第1報から、4月14日付の第9報までを本会webサイトの「東日本大震災関係情報」欄<<http://www.jsai.jp/shinsai/index.html>>に掲載した。また、被災資料の救済に役立てるため、阪神淡路大震災を教訓に全史料協が編集・発行した『文書館防災対策の手引き』(2001年1月刊・3版)の全文を上記の「東日本大震災関係情報」欄に掲載した。また、発災直後から、全史料協として組織的に独自の対応を行うべきだという意見が多くの会員から出された。

同時に、4月15日に東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会(以下「救援委員会」)にもアーカイブズ関係団体として参加した。これらの動きのなか、5月26日に開催された

平成23年度第1回役員会で、「東日本大震災臨時委員会」の設置が承認され、委員長に副会長の小松芳郎氏が就任した。また、会員から9名の委員(のち1名増員)を選任、さらに事務局を長野県立歴史館と京都府立総合資料館に置くことになった。臨時委員会は、第1回会議を6月9日に東京都千代田区で、第2回会議を7月2・3日に岩手県花巻市と釜石市で開催し、(1)被災状況の調査を行い今後への提言をまとめること、(2)実際に被災公文書等のレスキューを行うこと、などを決め、それぞれ実施担当者を委員の中から選出した。また、この7月2・3日には岩手県釜石市の旧第一中学校で、人間文化研究機構国文学研究資料館(文化財等レスキュー「人間文化研究機構内チーム国文学研究資料館」)との共催で、「東日本大震災水損資料復旧プロジェクト報告会」を開催した。これは、東日本大震災により被災した公文書等の救助復旧の促進を図るため、被災公文書等の救済活動に係る知識と技術の共有を目的としたもので、会員内外から20名近くの参加があった。なお、平成23年度第3回会議を平成24年2月7日に京都市で開催し、活動状況を確認の上、次年度の活動継続を決定した。

一方で、公文書等の救済の仕組み作りを関係各機関に働きかけた。5月27日には、井口和起会長、小松芳郎副会長が、全国知事会等の事務局を訪問し、要望書を提出した。さらに、6月8日には、内閣総理大臣ほかへの要望書を、井口和起会長、小川千代子参与、池田幾夫氏(理事代理・茨城県歴史館)が提出した(<http://www.jsai.jp/info2011/info_20110702-5.html>など参照)。要望の主な事項は、被災地にある公文書等の保全と救済についての種々の支援を行うこと、公文書等の被災実態の調査を行うこと、被災した公文書館や類似施設の復旧・再建に努めること、失われた資料の他機関所蔵資料からの復元方策を検討すること、被災から復興過程まで全体の記録の保存措置を講じること、「公文書等の管理に関する法律」の趣旨を生かした「震災復興構想」とすること、などであった。もっともこれらの要望は十全に活かされる事なく、平成24年2月に表面化した震災・原子力対応の政府各種会議の議事録の不備、という事態に立ち至ったことは残念でならない。なお、この事態を受けて、平成24年2月29日にも内閣総理大臣ほか「東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故関連公文書等の保全・保存に関する要望書」を提出している。

2. 陸前高田市での公文書レスキュー

震災後早い段階から、群馬県立文書館が被災地の公文書に関する情報を集め、関係各所に報告を行っていた。それを受け、全史料協としても応分の役割を果たすべく、被害の大きかった陸前高田市総務課と協議を進め、7月22日には会長名で陸前高田市長宛に救済計画の提案を行った。その後、8月10・11日には打ち合わせと試行作業をかねて、現地で、全史料協会会長井口和起と事務局に法政大学サスティナビリティ研究教育機構プロジェクトマネージャー金慶南准教授と下元省吾神奈川県立公文書館館長らが加わって打ち合わせを行った。結果、三者がそれぞれ分担して救済活動にあたることになった。

全史料協としては、5月の役員会を受けて、予備費から100万円が臨時委員会活動費として充当されていた（2012年度は寄付金も充当し活動費122万円）。この資金のみでは被災地で活動することが危惧されていたが、救援委員会から活動費の補助が出るようになったことと、NPO法人ジャパン・プラットフォームの補助資金や法政大学の支援を得て既に救済活動を始めていた金准教授のグループとの協働が行えるようになったことで活動内容が具体化した。8月29日から9月22日まで、集中的な活動が18日間、延べ49名が参加し金准教授のグループの協力を得て行われた。全史料協からの派遣者は連日3名前後ながら、陸前高田市職員と市職員OBの方々、市と岩手県に緊急雇用された地元の方々と共に作業を行い、実際には毎日15名弱の方々が12,000点以上の被災公文書の復旧に取り組んだ。その後も、10月中旬と1月にそれぞれ委員数名と事務局が現地を数回訪れて、実際の救済活動にあたるともに、作業の進行状況の確認と今後の方針についての協議を行っているほか、委員がボランティアとして定期的に現地を訪れている。

平成24年3月末、旧矢作小学校に運び込まれて乾燥作業が行われ資料名が明示された約12,000点の資料は、陸前高田市市役所職員による選別が行われ、約5,000点に圧縮されている。このうち、神奈川県公文書館が平成24年9月末に作業を完了する予定で1,200点を持ち帰ってクリーニングを行っている。また、別途議会関係文書300点については法政大学が、税務課関係文書240点については国立公文書館がそれぞれクリーニング作業を行った。なお、今年度は救済した公文書を再クリーニングし電子化する作業が、緊急雇用基金を活用した市の委託事業として行われている。全史料協としてはこの事業を支援しつつ、あらたな活動に備えているところである。

総じて、全史料協の活動は他の文化財等レスキュー事業とその性格を異にするユニークなものであったといえよう。被災地でのカウンターパートは普段から公文書管理を主管している総務部総務課であり、救済の対象にしても博物館等に学芸員等の収集活動を得てすでに収蔵されていた資料ではなく、市役所書

庫から救出された資料であった。そのために作業課程で選別が行われ、資料として不要と考えられた部分は廃棄された。またあくまでも市の活動をサポートする立場をつらぬいた。さらに、公文書という性格と量の多さから、なるべく現地で資料レスキューを行う方針をとった。その手法についても特定の資料に労力を割いて一種の「美品」に仕上げるのではなく、資料群全体の状態を安定させ、これ以上の毀損が発生しないようにつとめた。不十分ながら今後の大規模災害に際しての公文書レスキューの一つのパターンを示したのである。

3. 今後の課題

今後は、各地の地域資料・公文書等の被災状況のとりまとめを行い、一方で陸前高田市の被災公文書の救済活動を継続的に支援することが望まれる。

特に役所の文書を真の意味で救済していくためには、今後の文書管理や保存・利用の支援までが守備範囲となることに気づかされてきた。つまり、一時的に紙資料の状態を安定させたとしても、それを地域の諸活動のために保存・利用していただくためには幾重ものハードルがあるのである。また、今回の被災・復興過程にかかる資料や情報も未整理の状況で大量に蓄積されつつある。被災した資料、復興過程の資料をあわせて管理していく、ということは、機能としてのアーカイブズを一から作り上げていく作業、とも言えよう。全史料協の活動が真に実ったとすれば、その段階に至った時であろう。

今回の震災に際し、全史料協としては一定の活動を行ったとはいえ、その内容は、自らの、また周囲からの期待に添えるものではなかった。全国の機関連合体を標榜する以上は、震災直後から各地の状況を集約したり、複数の被災地に入ったり、また、陸前高田市においても支援に入る各種団体のとりまとめを行うなどのリーダーシップがあっても良かったのかもしれない。しかし、140あまりの機関会員が加盟しているとはいえ、もともと小規模機関が多い上に、この数年、機関の体力は急激に低下し、また有力館の脱会もあいついでいる。

特に現地での機動的な活動は、10月から臨時委員会に加わった林貴史という一個人にかかっていたと言ってもよい。「まさしく資料救援活動に最も貢献しているお一人といって過言ではないだろう」（関口真規子2012「全史料協全国大会にみる資料救援の課題と展望」『地方史研究』356）と評価されている、多面的で協調的な林の活動が全史料協の活動全体を支えたが、結局はその自発性に頼った構造を露呈した。また、震災後1年を経過し、現地活動報告が頻繁に行われるようになったあたりから、かえって会員間の被災地への関心が低下したように見受けられ、また案外に激災地を見た会員も少ないように感じる。「瓦礫を踏んだ」会員とそのような体験をしていない会員

の間に温度差が感じられるのである。

この点、10月27・28日に群馬県高崎市で開催された全史料協全国大会での報告内容について参加者が不安を抱き、非専門職出身の自治体職員へのアプローチの重要性を説いた上で、「現状を繰り返すような報告ばかりでなく、実践的な報告を取り入れた大会運営に、是非とも取り組んでほしいと願う次第である」（田淵正和2012「第三七回全史料協全国（群馬）大会参加記 実践的報告を期待して」『地方史研究』356）という感想が述べられたように、事務局としては、適切に状況を紹介するとともに、より多くの会員に現場を見せる仕組みを持ってなかった点が反省される。

しかし、現代社会に関心をもって職務にあたり、日常の活動をしている以上、それぞれ自主的になんらかの形で被災地に訪れているのではないかと思いでいた部分もあった。率直に言ってアーカイブズ業界は、「現代社会への関心や自己の職能を真に活かすために自己の日常をどこまで調整しうるか」という専門職としての能力やそれを支える矜持を育てることに失敗した、といえるだろう。

つまり、機関に属する個人の思いはともかく、また三重県など、図書館・博物館・アーカイブズが連携して対処した少数の事例を別として、アーカイブズ業界は、今回の震災に際してその社会的役割を果たす、という投企に失敗した、と現状では評価されるだろう。

4. おわりに

全史料協事務局の一員として、また文化行政に携わるもの・アーキビストのひとりとしての痛切な思いとともに本稿を記した。

被災地にある公文書等の保全や毀損資料の救済・復元、被災経過や今後の復興過程を記録する多様な資料の収集・保存は、地域住民の生活の再生に不可欠であり、地域の復興とともに、地方自治の推進にとっても極めて重要であることはいうまでもない。

しかし、特に公文書等の資料については、現状では救援委員会の活動では中心課題の一つにはなりにくい上、本会など関係団体の体力も弱く、活動の立ち上げまでに多くの時間を要した。なお、関係団体間での連携も充分とは言い難い状況がある。全史料協事務局担当を含め、阪神淡路大震災の際の教訓が十分に受け止められてはいないではなかったか。次に向けて真摯な検証と反省、さらに体制の整備が行われなければならない。

今後は、災害派遣の一環として文化財等レスキュー事業を仕組むこと、事前の大規模調査と情報集約がいっそう求められる。また、機関の体力が落ちるなかで、博物館・図書館との連携や融合のなかで重要な資料・情報が保存・利用される

体制の確立が求められる（福島幸宏2011「地域拠点の形成と意義」『デジタル文化資源の活用—地域の記憶とアーカイブ』〈勉誠出版〉）。

大規模災害はいつ起こるか予測が難しいため、備えは後回しになりがちである。しかし、阪神淡路大震災、東日本大震災を16年間というわずかな期間で経験し、また地震域の活動が活発になってきている、という状況である以上、一層の取り組みが必要になってきた。

また、地域の公文書や歴史資料は、その地域の存立と密接な関係をもって、保存・利用されてきた。資料の価値は、地域社会のなかでこそより発揮される側面があったのである。そう考えたとき、福島県で苦闘している本間宏氏の以下の言葉は痛切であろう。

膨大な人手を要して地域史料の保全措置を行うからには、その地域が再生するという希望が少しでもあれば続けていけますが、その希望が持てるかということ、何の確証もありません。

いま福島の人が一番求めているのは、これから福島で生きていっていいのかという問いへの答えだろうと思います
本間宏2012「東日本大震災と歴史資料保護活動—福島県の現状と課題—」国立歴史民俗博物館編『被災地の博物館に聞く』（吉川弘文館）

この問いと、近世以来の地域社会が本格的に維持できなくなる近い将来を見通したとき、アーカイブズや歴史学がこの間とってきた資料保存の枠組み自体が問い直される段階に至ったのかもしれない。